

第15回 6月11日の授業内容

- ◆ § 5. 標本分布
 - § 5.1 無作為抽出と無作為標本
 - § 5.2 統計量の分布
 - § 5.3 統計量の分布の近似
 - ◆ § 5.3.1 大数の法則

6/11/03

1

§ 5.1 無作為抽出と無作為標本

- ◆ 母集団 population
 - 有限母集団: 個体が有限個
 - 無限母集団: 個体が無限個
- ◆ 無作為抽出 random sampling
 - 復元抽出: sampling with replacement
 - 非復元抽出: sampling without replacement
- ◆ 無作為抽出の方法
 - 乱数 (一様乱数)
 - 乱数表

6/11/03

2

§ 5.1 無作為抽出と無作為標本(2)

- ◆ 無作為標本
 - 無作為抽出された標本
 - 標本の各個体は互いに独立で同じ確率分布にしたがう確率変数
- ◆ 統計量 statistics
 - 確率変数の関数
 - 統計量も確率変数であることに注意!!
 - 標本の各個体の関数であることが多い。
(例) 標本の算術平均(標本平均)

6/11/03

3

§ 5.2 統計量の分布

- ◆ 統計量の分布を知ることの必要性
 - 標本のデータを推測手段とする
 ⇒ 統計量で推測
 - 推測の精度を評価可能。 推測統計の基本
- ◆ 統計量 $g(X_1, X_2, \dots, X_n)$ の分布
 - 平均 $\zeta \equiv E(g(X_1, X_2, \dots, X_n))$

$$= \int \dots \int_{-\infty}^{\infty} g(x_1, x_2, \dots, x_n) f(x_1) \times f(x_2) \times \dots \times f(x_n) dx_1 \dots dx_n$$
 - 分散

$$\text{Var}(g(X_1, X_2, \dots, X_n)) = E\{(g(X_1, X_2, \dots, X_n) - \zeta)^2\}$$

$$= \int \dots \int_{-\infty}^{\infty} \{g(x_1, x_2, \dots, x_n) - \zeta\}^2 f(x_1) \times f(x_2) \times \dots \times f(x_n) dx_1 \dots dx_n$$

6/11/03

4

§ 5.2 統計量の分布(2)

- ◆ 標本平均 (標本データの算術平均) の分布

$$\bar{X}_n \equiv \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i \quad \text{ただし} \quad E(X_i) = \mu, \text{Var}(X_i) = \sigma^2$$
 - 1次モーメント(平均)

$$E(\bar{X}_n) = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n E(X_i) = \frac{n\mu}{n} = \mu$$
 - 平均回りの2次モーメント(分散)

$$\text{Var}(\bar{X}_n) = E(\bar{X}_n - E\bar{X}_n)^2 = \frac{1}{n^2} \sum_{i=1}^n E(X_i - \mu)^2 = \frac{n\sigma^2}{n^2} = \frac{\sigma^2}{n}$$

6/11/03

5

§ 5.2 統計量の分布(3)

- ◆ (例) 二項分布の (平均) 成功比率の分布
 - 確率 p で当たりの出るくじを n 回引いたときの「当たり」の回数を X とすると $X \sim \text{Bin}(n, p)$ 。
 - このとき、「当たり」の比率 X/n の分布を考えよう。二項分布の性質より、

$$E(X/n) = (1/n)E(X) = np/n = p$$

$$\text{Var}(X/n) = (1/n^2)\text{Var}(X) = np(1-p)/n^2 = p(1-p)/n$$

 となることがわかる。

6/11/03

6

§ 5.2 統計量の分布(4)

◆有限母集団の場合の統計量の分布

- B_1, B_2, \dots, B_N : 母集団の個体
- 標本数 n の非復元抽出を行う場合
- 標本平均の分布のモーメント

$$E(\bar{X}_n) = \frac{N-1}{N} \frac{C_{n-1}}{C_n} \frac{1}{n} \sum_{j=1}^N B_j = \frac{1}{N} \sum_{j=1}^N B_j$$

$$\text{Var}(\bar{X}_n) = \frac{N-n}{N-1} \frac{1}{n} \left(\frac{1}{N} \sum_{j=1}^N \left(B_j - \frac{1}{N} \sum_{k=1}^N B_k \right)^2 \right)$$

6/11/03

7

§ 5.3 統計量の分布の近似

§ 5.3.1 大数の法則 law of large numbers

標本平均が標本数 n のとき母集団平均 μ に収束するという法則

◆チェビシェフの不等式 Chebyshev's inequalityによる説明

- 平均、分散が $E(X) = \mu, \text{Var}(X) = \sigma^2$ である確率変数 X について任意の定数 $c > 0$ に対して次の式が成立する。

$$P(|X - \mu| \geq c) \leq \frac{\sigma^2}{c^2}$$

- $E(\bar{X}_n) = \mu, \text{Var}(\bar{X}_n) = \sigma^2/n$ であるから、任意の $\epsilon > 0$ に対して

$$P(|\bar{X}_n - \mu| \geq \epsilon) \leq \frac{\sigma^2/n}{\epsilon^2} \quad \text{よって} \quad \lim_{n \rightarrow \infty} P(|\bar{X}_n - \mu| \geq \epsilon) = 0$$

6/11/03

8

§ 5.3.1 大数の法則(2)

◆大数の法則 (Khintchine's law)

- 大数の弱法則ともいう

X_1, X_2, \dots, X_n を平均が μ である、互いに独立な確率変数であるとき、すなわち、 $E(X_i) = \mu$ and $X_i \perp X_j$ for $i \neq j$ であるとき、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} P(|\bar{X}_n - \mu| < \epsilon) = 1 \quad \forall \epsilon > 0$$

が成立する。このことを \bar{X}_n が μ に確率収束するといひ、

$$\bar{X}_n \xrightarrow{P} \mu \quad \text{または、} \quad \text{plim}_{n \rightarrow \infty} \bar{X}_n = \mu \quad \text{と表す。}$$

6/11/03

9

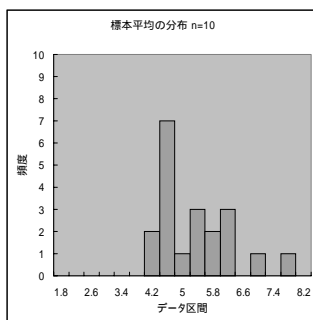
§ 5.3.1 大数の法則(3) 実例

- ◆大数の法則を確認するための実験
 - $X \sim N(5, 16)$ にしたがう確率変数を n 個抽出した標本を20ヶ作成。
 - 20ヶの標本それぞれについて、標本平均(算術平均)を求め、標本平均の分布(ヒストグラム)を作成。
 - n として、10, 40, 160, 1000を採用

6/11/03

10

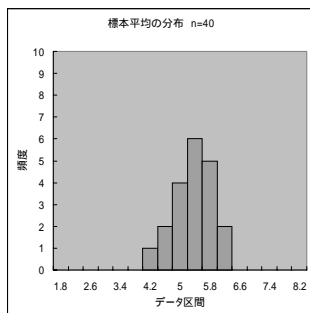
§ 5.3.1 大数の法則(4) 実例 $n=10$



6/11/03

11

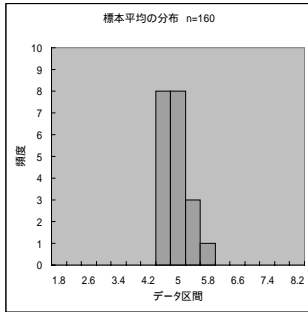
§ 5.3.1 大数の法則(5) 実例 $n=40$



6/11/03

12

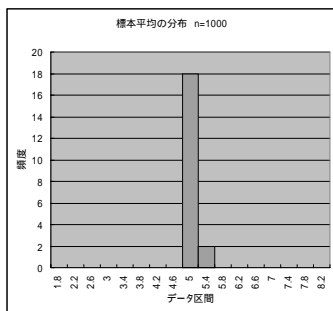
§ 5.3.1 大数の法則(6) 実例 n=160



6/11/03

13

§ 5.3.1 大数の法則(7) 実例 n=1000



6/11/03

14
